

地域開発にともなう住民生活の変化と住民意識

— 第Ⅱ次調査 —

(その3) 神栖町・波崎町の中学生に対する調査結果

白	幡	悦	子
木	本	英	人
帯	刀		治
古	田		仁

I ま え が き

われわれは、茨城大学地域総合研究所年報第6号で「地域開発にともなう住民生活の変化と住民意識」(第Ⅱ次調査)と題して報告したように、茨城県鹿島郡神栖町および同郡波崎町のうち神栖寄りの地区に居住する住民を対象に調査を実施した。(昭和47年7月および10月)対象者は上記の通学区各中学2年生ならびに小学4年生の父兄(主として父親)であつた。これと同時に、各中学の2年生を対象に調査を行なつたので、本稿ではその結果を報告する。

回収された調査票は539票(神栖第一中学:124, 同第二中学:181, 同第三中学:68, 波崎第二・第三中学 166, 男子:252, 女子:287), 回収率90.4%であつた。このような高い回収率が得られたのは、ひとえに各校の関係諸先生の御協力によるものであり、ここに感謝の意を表すると共に、報告の発表が遅れたことをお詫びする次第である。

回答者539名を、大人の場合にならって地区別、移転・非移転別にわけると<表:1>のようになる。非移転層(C)の比率が66.8%と大人の場合より高く、地元3町内での移転者(B), 他府県・他市町村よりの転入者(A)の比率が、それぞれ1割強, 2割弱と低い、Ⅲ地区にあつては3者の割合が比較的接近している。ここは、年報6号所載の報告でも述べたように、工業団地に隣接しながら移転対象から外された奥野谷浜の一部を含むが、そこでは自発的に転居する住民も多く、空屋や廃屋もあちこちに見られ、局部的な過疎現象を呈しているところである。調査時においてすでに中学校の移転が予定されていたので、現況はさらに変化をみせているであろう。われわれとしては、転入, 移転, 非移転3層の割合が拮抗してくれることを期待したが、非移転層が大勢を占めることとなった。転入層(大半が進出企業社員層)の子弟の多くがまだ小学校在学であることが当初の予想よりもこの比率を低めた理由と思われる。

本稿で報告される調査の内落は、生活時間の概略, 学科に対する好悪, 卒業後の進路, 将来の希望職業および活動, 小遣いの額とその用途, 現在の悩み・不安, そして「鹿島開発」に対する意見・評価, 「公害」に対する意見・態度などである。中学生の生活の実態をしるには、もとよりこれでは不十分であるが、主として未来志向を探ることにより、彼

〈表：1〉 回答者の地区別・移転別一覧

地区別	移転別		不明	計
	A	B		
	転 入	地区内移転	非 移 転	
I 神栖一中	10 9.8 8.1	10 16.0 8.1	104 28.9 83.8	0 23.0 100
II 神栖二中	36 35.3 19.9	21 33.3 11.6	119 33.1 65.7	5 33.6 100
III 神栖三中	26 25.2 38.2	20 31.7 29.4	22 6.1 32.4	0 12.6 160
IV 波崎二・三中	30 29.4 18.1	12 19.0 7.2	115 31.9 69.3	9 30.8 100
計	102 100 18.9	63 100 11.7	360 100 66.8	14 539 100

注) 各欄上段は実数, 下段左半は移転別各層に占める地区別各層の比率, 下段右半は地区別各層にしめる移転別各層の比率

らの生活意識の一端を明らかにし, また「開発」「公害」という社会的事象に対する態度・意識が大人たちのそれと, どのような共通性や差異をみせるかを知ることによって, 標題に掲げたわれわれの基本的テーマへの接近の一環となりうると考え, この調査を企画した。

調査は白幡以下4名で行なったが, 本報告の執筆は白幡が担当した。

II 回答の家族構成

回答者の家族数, 同胞数, 世代構成については〈表：2〉に示すとおりである。平均家族数は5.4人(転入層4.5人, 移転層5.4人, 非移転層5.7人), 平均同胞数2.6人(転入層2.4人, 移転層2.8人, 非移転層2.6人)であるが, 回答者1子のみで同胞がないという家族

〈表：2〉 回答者の家族構成

人数	家 族 数 (%)	世 代
1(人)	—	46 (8.5)
2	1 (0.2)	212 (39.3)
3	37 (6.9)	196 (36.4)
4	123 (22.8)	69 (12.8)
5	131 (24.3)	9 (1.7)
6	111 (20.6)	4 (0.7)
7	93 (17.3)	—
8以上	40 (7.5)	—
無答	3 (0.6)	3 (0.6)

は, 転入層で約13%あるのに対し, 他の2層(地元住民層)は平均して7%である。

次に, 両親の年齢と職業を〈表：3〉に示す。父親の平均年齢は42.1才, 母親は40.5才である。職業は大人の場合と同じ基準で分類した。父親が進出企業社員であると答えたものは全体で87名であるが, そのうち61名が転入層であり, この層での進出企業社員(父親)のしめる比率は60%, 商工・自営業ならびに地元企業・商店員がそれぞれ14%で農業は皆

〈表:3〉 両親の年令と職業

両親の年令			両親の職業		
年令	父	母	職業	父	母
~34才	(%) 7 (1.3)	31 (5.8)	農 業	214 (39.7)	233 (43.2)
35~39	116 (21.5)	193 (35.8)	商工・自 営	73 (13.5)	49 (9.1)
40~44	216 (40.1)	189 (35.1)	進出企業社員	87 (16.1)	14 (2.6)
45~49	109 (20.2)	69 (12.8)	地元企業・商店員	63 (11.7)	40 (7.4)
50~54	26 (4.8)	20 (3.7)	公務員・団体職員他	47 (8.7)	29 (5.4)
55~	11 (2.0)	1 (0.2)	無 職	5 (0.9)	125 (23.2)
無 答	54 (10.0)	36 (6.7)	無 答	50 (9.3)	49 (9.1)

無である。非移転層にあっては農業が53%, 商工・自営, 地元企業・商店員, 公務員・団体職員他がそれぞれ約11%, 移転層では農業が32%で非移転層に比べかなり低く, 商工・自営が24%, 地元企業・商店員が16%となっている。母親の職業は転入層にあって62%が無職で, これは主婦専業とみられるが, 非移転層で57%, 移転層で40%が農業と答えているところから, 農業を主な生業もしくはその一部としている家庭が回答者の半数近くを占めるとみてよいであろう。(以上の比率はいずれも約1割あった無答者を含めての数値である。)

なお, 転入層の前住地は, 四国を除く全国各地にわたっているが, そのなかで多いのは東京, 神奈川, 三重, 岡山の各都県で, 転入の年は昭和45年が約60%, ついで44年, 46年が20%強, 47年が14%である。また, 移転層の前住地は深芝浜, 奥野谷浜, 波崎町の宝山, 西宝山, 柳川などの地区が比較的多く, 移転の年は44年が22%でその前後42年から47年にかけて10数%の移転が回答されている。

Ⅲ 生活時間

まず, 通学のためにどのぐらいの時間をかけているかをみよう。〈表:4〉によれば, 通学的手段としては自転車の利用が最も多く全体の約70%。Ⅰ地区, Ⅱ地区でとくにその割合が高い。所要時間だけを問題にすると, 20分が全体で56%, 10分が29%, 30分が16%である。地区別ではⅢ地区で約半数が10分と答えているが他はいずれも20分かかるものが大半でⅠ, Ⅳ地区では60%をこえる。これらからみて, 通学のため必要とされる時間, 労力は中学2年生の生活時間のなかで, さほど負担にはなっていないものと思われる。

では次に, 自宅での学習時間, テレビ視聴時間, 下校後友だちと遊ぶ時間ほどの位であろうか。〈表:5〉および〈図:1〉によれば, 勉強の時間は1時間前後というものが多く, 0.5~1.5時間の間約70%のものがはいる。男子と女子ではさほど大きな差はみられないが, 男子の1割ちかくが自宅での学習時間0というのはやや目をひく結果ではある。時間数でみるかぎり, 転入層の方が他の2層より勉強の時間は多い。これはおそらく進学志望の傾向(後述)と関連があろう。しかし, いずれにしても, 現今の過熱気味の進学・受験風潮のなかでは「のんびりムード」を感じさせる。波崎地区で進出企業社員層(いずれも

〈表：4〉 通学手段と所要時間

手段	地区 時間	I		II		III		IV		全 体	
		神栖一中		神栖二中		神栖三中		波崎二・三中			
徒 歩	～10分	6)	29)	4)	12)						
	～20	9) 16.9%	28) 41.4%	7) 19.1%	3) 9.0%					51	9.5%
	～30	6)	18)	2)	0)					47	8.7%
自 転 車	～10	17)	20)	19)	23)					79	14.6%
	～20	68) 82.2	60) 50.8	20) 60.3	92) 83.1					240	44.5%
	～30	17)	12)	2)	23)					54	10.0%
バ ス	～10	0)	4)	11)	6)					21	3.9%
	～20	0) 0.8	2) 3.3	1) 20.6	2) 4.8					5	0.9%
	～30	1)	0)	1)	0)					2	0.4%
その他・無答		0	8	1	5					14	2.2%
計		124	181	68	166					539	

転入)の母親たち数名と面接した際、(小学校在学生の母親たちであったが)「こちらへ来てから子どもが勉強しなくなった」「全体ののんびりしたムードにひきずられているようへ来て将来進学が心配だ」「また都会の学校へ戻ったらついていけないのではないか」というような、母親としての懸念がこもこも表明されたが、中学生の回答結果も、そうした母親たちにとっては不安・不満のたねであるかもしれない。

一方、テレビの視聴時間は一般に学習時間より多い。平均してみると、全体では2.5時間(男子2.6時間、女子2.4時間)である。では、どのようなテレビ番組が好まれているか。好きな順に番組名を5つ列挙させてみた。それらを一応ジャンル別に整理してみると〈表：6〉のようになる。(回答は番組名を記入させたので、同一ジャンルのものがある例も多かった。)これによると連続ドラマ、とくにホーム・ドラマ、青春もの、あるいは一時流行した根性ものといわれる内容のドラマへの好みが圧倒的に多い。

次に、下校後友だちと遊ぶ時間をみると、0時間というのが全体で約40%に達する。転入層、移転層ではとくにその比率が高く、女子でも0時間は約半数に及んでいる。前者の場合転居にともなって、以前からの交友関係が変化した事情があるのかもしれない。「遊び」時間の平均は全体で0.8時間、男子で1.2時間、女子で0.5時間と差が大きく、また転入層0.4時間、移転層0.6時間、非移転層1.0時間というように層によってもかなりのちがいをみせている。

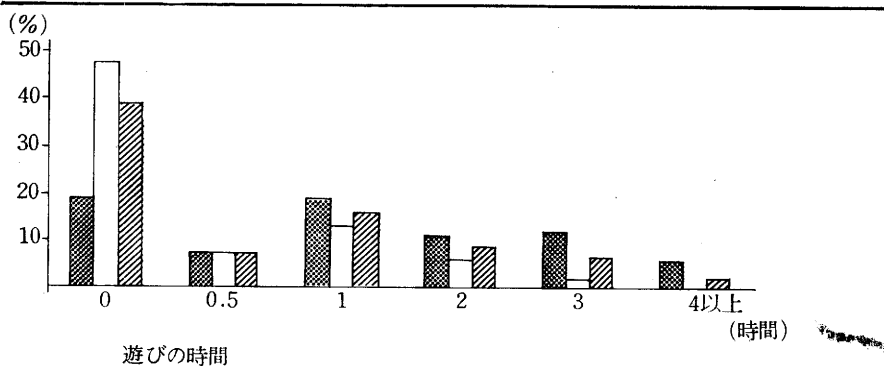
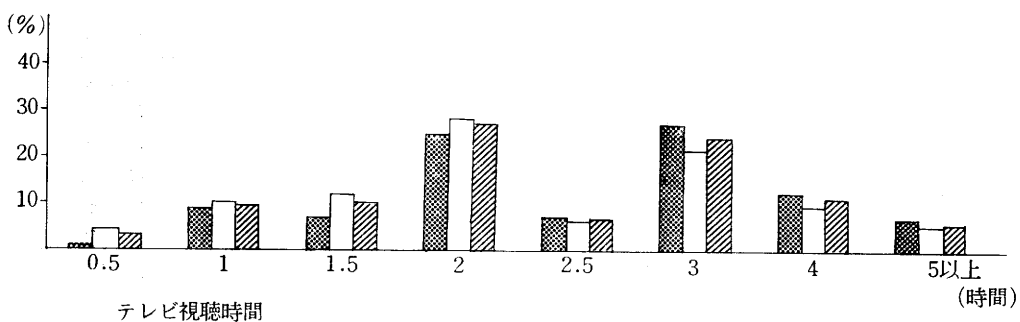
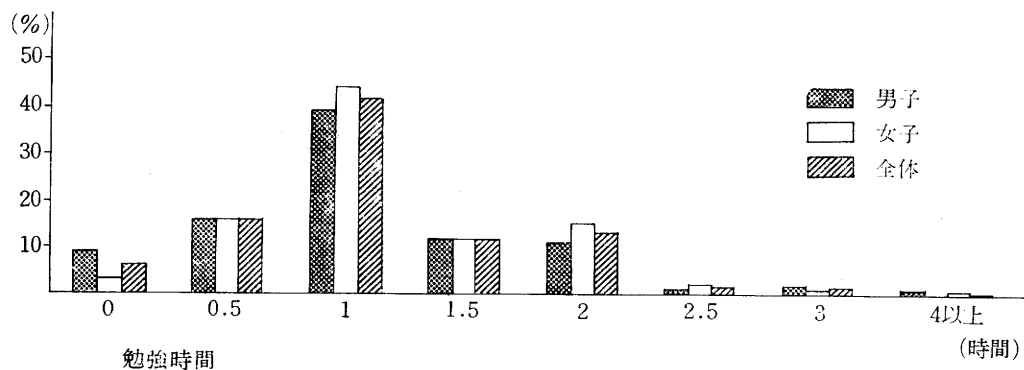
IV 好きな学科・嫌いな学科

学科に対する好悪は、好きな学科、嫌いな学科それぞれ順位を付して3科目挙げさせた結果からみることにする。〈表：7〉は好悪それぞれ選ばれた学科に順位によって重みづけを行ない、総合順位として表示したものである。好きな学科の上位3科目は保健・体育、社会、国語、そして嫌いな学科の上位3科目は数学、英語、理科となっているが、男

<表:5> 自宅での学習時間, テレビ視聴時間, 友だちと遊ぶ時間

		移 転 別			男 女 別		全 体 (539)
		転 入 (102)	移 転 (63)	非移転 (360)	男 (252)	女 (287)	
勉 強 時 間	0	5 (4.9) [%]	4 (6.3)	21 (5.8)	23 (9.1)	8 (2.8)	31 (5.8)
	~0.5	13 (12.7)	10 (15.9)	59 (16.4)	39 (15.5)	45 (15.7)	84 (15.6)
	~1	40 (39.2)	34 (54.0)	147 (40.8)	99 (39.3)	125 (43.6)	224 (41.6)
	~1.5	16 (15.7)	8 (12.7)	39 (10.8)	30 (11.9)	34 (11.8)	64 (11.9)
	~2	18 (17.6)	4 (6.3)	45 (12.5)	27 (10.7)	43 (15.0)	70 (13.0)
	2.5	5 (4.9)	0	4 (1.1)	3 (1.2)	6 (2.1)	9 (1.7)
	3	2 (2.0)	0	6 (1.7)	5 (2.0)	3 (1.0)	8 (1.5)
	4~	2 (2.0)	0	1 (0.3)	3 (1.2)	0	3 (0.6)
	無答	1 (1.0)	3 (4.8)	38 (10.6)	23 (9.1)	23 (8.0)	46 (8.5)
T V 視 聴 時 間	~0.5	8 (7.8)	0	6 (1.7)	2 (0.8)	13 (4.5)	15 (2.8)
	1	13 (12.7)	3 (4.8)	34 (9.4)	22 (8.7)	29 (10.1)	51 (9.5)
	1.5	20 (19.6)	6 (9.5)	25 (6.9)	17 (6.7)	34 (11.8)	51 (9.5)
	2	33 (32.3)	17 (27.0)	88 (24.4)	63 (25.0)	80 (27.9)	143 (26.5)
	2.5	3 (2.9)	3 (4.8)	29 (8.1)	18 (7.1)	17 (5.9)	35 (6.5)
	3	14 (13.7)	18 (28.6)	94 (26.1)	67 (26.6)	61 (21.2)	128 (23.7)
	4	7 (6.9)	8 (12.7)	41 (11.4)	31 (12.3)	26 (9.0)	57 (10.6)
	5~	2 (2.0)	7 (11.1)	21 (5.8)	17 (6.7)	15 (5.2)	32 (5.9)
	無答	2 (2.0)	1 (1.6)	22 (6.1)	15 (5.9)	12 (4.2)	27 (5.0)
遊 び の 時 間	0	55 (53.9)	35 (55.6)	114 (31.7)	72 (28.6)	137 (47.7)	209 (38.8)
	0.5	11 (10.8)	1 (1.6)	25 (6.9)	18 (7.1)	20 (7.0)	38 (7.1)
	1	18 (17.6)	9 (14.3)	55 (15.3)	47 (18.6)	37 (12.9)	84 (15.6)
	2	5 (4.9)	4 (6.3)	36 (10.0)	28 (11.1)	18 (6.3)	46 (8.5)
	3	1 (1.0)	4 (6.3)	28 (7.8)	30 (11.9)	5 (1.7)	35 (6.5)
	4~	1 (1.0)	1 (1.6)	13 (3.6)	15 (5.9)	0	15 (2.8)
	無答	11 (10.8)	9 (14.3)	89 (24.7)	42 (16.7)	70 (24.4)	112 (20.8)

註) 移転別では不明のもの(14名)を除く



<図:1> 自宅での勉強時間・テレビ視聴時間・友人との遊びの時間

<表:6> 好まれているテレビ番組

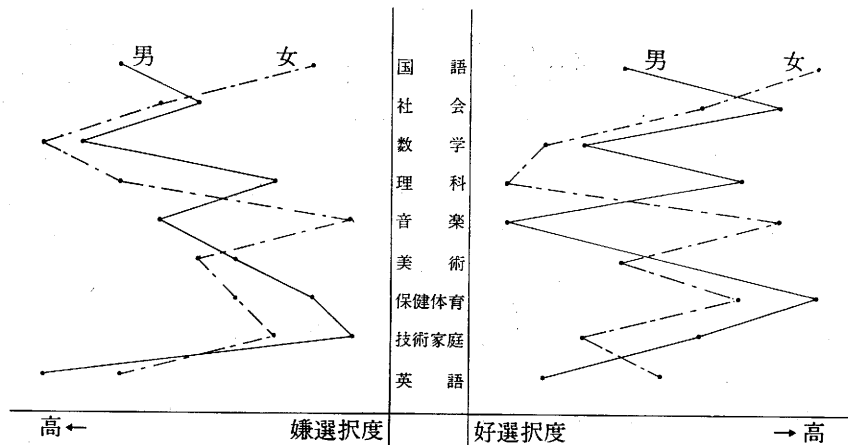
	1位	2位	3位	4位	5位	
ドラマ	66.2	57.3	53.9	48.9	41.5	飛び出せ青春, ありがとう, ミュンヘンへの道, 光る海, など
歌謡番組	8.5	11.1	10.7	11.3	9.2	ベスト30歌謡曲, NTV紅白歌のベストテン, など
バラエティ・ショー	5.2	5.4	7.5	5.3	5.3	8時だよ全員集合, ヤング・オーオー, など
子供向け番組	2.5	3.8	4.4	4.3	7.4	マンガ, 怪獣もの
スポーツ番組	3.8	3.9	2.2	2.8	2.4	プロ野球, プロボクシング, プロレスなど

註) 数字は各順位でそれぞれのジャンルに含まれる番組名をあげたものの比率。

<表:7> 好きな学科・嫌いな学科

	好きな順位			嫌いな順位		
	男	女	全体	男	女	全体
国語	6 (6.3)	1 (23.0)	3 (15.2)	3 (11.1)	8 (1.7)	5 (6.1)
社会	2 (19.8)	4 (11.1)	2 (15.2)	5 (7.5)	4 (4.9)	4 (6.1)
数学	7 (5.2)	8 (3.5)	9 (4.3)	2 (27.0)	1 (37.6)	1 (32.7)
理科	3 (13.5)	9 (2.1)	8 (7.4)	7 (4.0)	2 (20.6)	3 (12.8)
音楽	9 (1.2)	2 (13.9)	7 (8.0)	4 (11.1)	9 (2.4)	7 (6.5)
美術	5 (7.1)	6 (9.1)	5 (8.2)	6 (6.7)	5 (4.9)	6 (5.8)
保健・体育	1 (22.2)	3 (15.3)	1 (18.6)	8 (2.0)	6 (4.2)	8 (3.2)
技術・家庭	4 (13.5)	7 (6.6)	4 (9.8)	9 (0.8)	7 (1.4)	9 (1.1)
英語	8 (6.0)	5 (11.8)	6 (9.1)	1 (27.4)	3 (18.8)	2 (22.8)

註) 各欄左側の数字は好きな学科, 嫌いな学科それぞれの総合順位。括弧内は好き, 嫌いそれぞれ当該学科を1位にあげたものの%。



<図:2> 学科の好・嫌選択度

女間で好き・嫌いの選択度にかかなりの差がみられる学科もいくつかあるので、〈図：2〉にその対照を示した。これによると、音楽、理科、国語は選択度の男女差が大きい。一般に、男子は理数科を好む、あるいは得意とし、女子は国語、音楽、美術などを好きな学科とするとはよくきかれることであるが、ここでの結果にもそうした傾向はみられるものの、むしろ、男女で若干の差はあるとはいえ、保健・体育、技術・家庭の両学科が男女共に好まれ、数学がもつとも敬遠されていることは一応注目しておいてよいであろう。

V 小遣いの額とその用途

鹿島での「開発ブーム」が取沙汰された頃、子どもたちの金使いが目立つて荒くなったとして、それにまつわるエピソードが新聞紙面ににぎわしたものであった。例えば昭和45年6月23日付の朝日新聞は、「子どものおこづかいもここ数年ウナギのぼり。」ある小学校の教師が「昨年、担任の5年生を対象に調べたところ1日の平均高は約60円だった。いまでは最低の子どもでも100円、平均すれば200円を越える数字になるだろう……」と報じ、

「運動場などに10円玉、100円玉が落ちていても、落し主が申出るとはまずない」とか「PTA会費を支払うのに1000円札を出して、『先生、おつりはいらさないよ』という児童がいた」などのエピソードを紹介していた。

われわれの調査でも「小遣いの額とその用途」を質問項目に加えたが、結果をみるにあたっては何よりも生徒自身の「申告」である点を念頭におかなければならないと考える。

さて、回答者の年齢を考慮し、設問は以下のような形式をとった。

あなたはどのくらいおこづかいをもらっていますか。

月に一回こづかいをもらう人 月に___円

週に一回こづかいをもらう人 週に___円

毎日こづかいをもらう人 日に___円

その他 一回に___円

(月に2回とか、お正月やお盆の時だけもらうという人はここに書いて下さい。)

従つて、回答には重複もみられたし、(例えば、月に〇円とその他臨時に〇円というように)集計上も機械的に平均額を算出するというわけにはいかなかつた。そこで、やや煩雑にわたるが、小遣いの額についての回答結果を〈表：8〉のように整理してみた。これによると、全体で約半数のものが、月1000円～1500円と答えている。転入層ではとくにこのクラスのものが多く、75%をこえる。移転層では35%、非移転層では45%、男女別では男43%、女55%のものが月1000円～1500円との回答である、しかし、いずれにせよ、さきの新聞記事にあった、1日最低100円、平均すれば200円を越える、というのからすればはるかにすくない額である。しかも新聞でとりあげられていた事例は小学校5年生の場合であり、今回は中学2年生なので、なおさらこの結果は予想外の感が深い。中学生たちが、小遣いの額をことさら内輪に回答したのであろうか。それとも、「鹿島の子どもたちの金使いの荒さ」は、一部の例が誇張されて伝えられたものなのか。この疑問に答るだけの資料はもちあわせていないが、おそらく両方の要因ともありえぬことではなかろう。金額を別とすれば、小遣いを月ぎめでもらっているものが多く、転入層の89%、移転層60%、非移転層64%、男子では55%、女子で71%、I地区では78%、II地区66%、III地区65%、IV地区64%に達する。かなり多額の小遣いを貰っているものも、また貰い方の決っていない

〈表：8〉 小遣いの額

	地区別				移転・非移転別			性別		全体	%	
	I	II	III	IV	転入	移転	非移転	男	女			
回 答 者	124	181	68	166	102	63	360	252	287	539		
月に	1000円	25	37	18	52	54	10	65	55	77	132	24.5
	～1500	50	37	14	34	23	12	97	53	82	135	25.0
	～2000	16	30	7	14	9	6	50	33	34	67	12.4
	3000未満	6	12	3	4	5	6	14	17	8	25	4.6
	3000以上		4	2	2		4	4	5	3	8	1.5
週に	100			1	1	1		1	2		2	
	200			2	2	1		3		4	4	
	300		1	1	2	1	2	1	2	2	4	
	400	1	3			1		3	2	2	4	
	500		4	2	2	1	2	5	6	2	8	
	700以上			2				2	2		2	
日に	～ 50	5	3	3	4		4	10	10	5	15	2.8
	～ 100	3	11	6	3		5	18	8	15	23	4.3
	～ 200	2	1	1	1		3	2	3	2	5	
	～ 300	1	1				1	1	1	1	2	
	400以上		2				1	1	1	1	2	
不定期	100	8	7	3	3		6	14	14	7	2	3.9
	200	3	1	1	5		1	8	7	3	10	1.9
	300	1	1		1			3	1	2	3	
	500	1	2		5	1	1	6	3	5	8	
	1000	3	6		1	1		9	6	4	10	
	不定	3	7	6		2	3	11	8	8	16	2.9
正月・盆	1000		1					1	1		1	
	2000				2	1	1	1	1	2	3	
	3000	1		1		1		1	1	1	2	
	5000	1		2			2		1	1	2	
	10000未満			2		2			1	1	2	
	10000	1		1		1		1	2		2	
	20000以上			1	1		1		1	1	2	
もらわない 無 答		2	1	1	1	2		1	3		3	
			1		10	2		10	6	7	13	2.4

註) 回答は一部重複，移転別で不明のもの(14名)は除外，%は回答者に対する比率。

ものもあるが，今回の結果でみるかぎり，小遣いの与えられ方は概して堅実であるといえる。なお，小遣いを「貰わない」と答えたものは3名(いずれも男子)であったが，そのうち1名は新聞配達をして，その報酬を小遣いにあてているということであった。

次に，小遣いの用途については，〈表：9〉に掲げた諸項目のうち，あてはまるものに○印を，そのなかで最も多い使い途に◎印を付けさせた。それによると，「食べもの・飲

〈表：9〉 小遣いの使途

		移転・非移転別			性 別		全 体	%
		転 入	移 転	非移転	男	女		
回 答 者		100	61	349	243	280	523	
◎の付された使途	学 用 品	8	4	25	7	30	37	7.1
	本・雑 誌	23	10	39	18	56	74	14.1
	玩 具	1	3	7	11		11	2.1
	衣類・装身具	8	2	5	6	9	15	2.9
	趣味・蒐集品	9		32	27	16	43	8.2
	飲 食	24	32	155	95	121	216	41.2
	貯 金	11		12	17	8	25	4.8
	そ の 他	5		3	4	4	8	1.5
無 答	11	10	71	58	36	94	18.0	
○の付された使途	学 用 品	42	26	131	67	135	202	38.6
	本・雑 誌	43	36	135	80	139	219	41.9
	玩 具	10	4	21	32	4	36	6.9
	衣類・装身具	12	10	36	26	33	59	11.3
	趣味・蒐集品	16	4	46	45	24	69	13.2
	飲 食	41	26	170	55	189	244	46.7
	貯 金	16	13	55	38	47	85	16.2
	そ の 他	11	5	15	16	15	31	5.9
無 答	5	1	8	9	5	14	2.7	

註) 回答者は、前項で小遣いをもらわないと答えたもの、および無答(計16)を除いた人数。
移転別で不明のものも除く。 ○印の使途は重複回答、%は回答者に対する比率。

みもの」に小遣いを使うものが最も多く、全体の41%である。とくに移転層では52%、非移転層では44%が、最も多い使い途として飲食をあげているが、転入層では24%で、「本・雑誌」の購入にあてるといもの(23%)とほとんどかわらない。このことは、家庭の状況ないし雰囲気の違いを示唆するように思われる。すなわち、両親とくに母親が、子どもの小遣いの使い途をチェックしたり指導したりするか、いわゆる「買い食い」といわれる行動に対する母親の対応・態度、「お八つ」などを家庭で用意しておくか等々、小遣いを、その与え方を含めて躰けの一環としてどう扱っているかということと関連があると考えられるからである。そして、この点に関しては、地元住民層の母親たちは比較的放任しているように推測される。

「飲食」に次いで多い使途としては、本・雑誌の購入、学用品の購入があげられている。別の設問で定期的に購読している雑誌や本について訊ねた結果をみると(小遣いで購入するものとは限らない。),「なし」(無答も含む)と答たものは48%にのぼったが、回答のあったなかで比較的多いのが「○○コース」「△△時代」「計画学習」などのいわゆる学習雑誌で男女を通じて23%、その他男子は「少年マガジン」「少年サンデー」「少年ジャンプ」など、女子は「マーガレット」「少女フレンド」「少女コミック」など、男女ともではあるが女子の方がやや多いもので「セブン・ティーン」「明星」「平凡」など

があげられている。

VI 中学卒業後の進路（進学希望）

ここでは、中学卒業後の進学希望（意志）の有無、および進学を希望しない者の場合、どのような職業や方向にすすみたいと思っているかについて訊ねた結果をとりあげる。〈表：10〉をみると「高校へ進学するつもりである」ものは全体で76.4%であるが、この

〈表：10〉 進 学 希 望

		移転・非移転別			性 別		全 体
		転 入	移 転	非移転	男	女	
高 校	進学するつもりである	93 (91.2)	50 (79.3)	262(72.8)	189(75.0)	223(77.7)	412 (76.4)
	進学するつもりはない	3 (2.9)	3 (4.8)	11(3.1)	9(3.6)	9(3.2)	18 (3.4)
	まだきめていない	4 (3.9)	9 (14.3)	72(20.0)	47(18.7)	44(15.3)	91 (16.8)
	無 答	2 (2.0)	1 (1.6)	15(4.2)	7(2.8)	11(3.8)	18 (3.4)
大 学	進学するつもりである	22 (21.6)	5 (7.9)	19(5.3)	29(11.5)	19(6.6)	48 (8.9)
	進学するつもりはない	22 (21.6)	29 (46.0)	152(42.2)	87(34.5)	123(42.9)	210 (39.0)
	まだきめていない	53 (52.6)	17 (27.0)	140(38.9)	102(40.5)	111(38.7)	213 (39.5)
	無 答	5 (4.9)	12 (19.0)	49(13.6)	34(13.5)	34(11.8)	68 (12.6)

註) 移転別は不明(14)を除く。括弧内は%

比率は男子より女子の方が僅かながら高い。これは男子にあって未確定者が2割近くいることによるが、最終的に進学希望率ないし進学率がどのようになるにせよ、中学2年の7月～10月の時点で2割近い未確者というのは決してすくない数ではないであろう。転入層にあっては進学希望者も、また進学意志のはっきりしている者も他の2層より高率である。大学への進学ということについては、時間的にかなり先のことなので当然の結果として未確定者が約40%に達する。ここでは前の場合と逆に転入層で未確定者が多く半数をこえている。しかし大学進学希望・意志は移転・非移転層にくらべ転入層の方が（調査時点にあっては）はるかにつよいとだけはいえよう。

では、「高校に進学するつもりはない」という18名は、中学卒業後の進路をどのように考えているか。男子9名のうち3名が、電気工事または電気器具関係の職場に、2名が整備・修理（おそらく自動車であろう）工場に、他の4名が運送店、清掃社への勤務と、調理師、左官職の見習いになると答えている。そしてその理由としては、「収入がよい」（3名）「好きだし面白い」（3名）「（家業の）あとつぎ」（2名）があげられ、1名は「なんでもよいからつとめたい」と答えている。同じく「進学しない」女子9名の中学卒業後の進路は、店員（電気器具、花屋、果物屋）4名、美容・洋裁・編物学校各1名、調理師見習1名、アナウンサー（有線放送であろうか）1名となっている。進路選択の理由は「好き・面白い」（3名）、「収入がよい」「技術が生かせる」（各1名）「独立したい」（1名）というのが積極的理由で「（自分は）進学にはむかない」「なんでもよいからつとめる」というものが3名であった。

VII 将来の希望職業

ここでは、前項の進学よりさらに将来のことにわたるが、中学生が希望し、あるいは憧れている職業はどのようなものであるか、を通して未来志向の一端を探る。設問は「あなたは将来どういう仕事（職業）につきたいですか」というもので、理由も併記するようもとめたが、それについては記入はほとんどみられなかった。結果を〈表：11〉に示す。回

〈表：11〉 希望する職業・仕事（重複回答）

	男	女	全 体		男	女	全 体
会社員・公務員	29	23	52	通 訳	1	5	6
美容師・理容師	1	28	29	設 計 士	6		6
デザイナー	1	17	18	修 理 工	6		6
機械・電気関係	18		18	スポーツ関係	6		6
保 母		13	13	マスコミ・ジャーナリスト	2	3	5
商 業	6	7	13	マンガ家	1	4	5
調 理 師	8	4	12	スチュワーデス		4	4
教 師	2	7	9	アナウンサー		4	4
医 師	4	5	9	農 業	1	1	2
歌手・音楽関係	3	6	9	家業をつぐ・手伝う	7	1	8
サービス業	4	5	9	自立できる仕事	1	3	4
看 護 婦		8	8	そ の 他	11	9	20
船長・船員	7		7	別 に ない、わ か ら ない	57	77	134
パイロット	7		7	無 答	73	47	120

答されたなかでは、会社員・公務員が最も多く約18%（回答のあった285名に対する比率）である。家庭の職業とのクロスはみていないが、一応これは将来の安定への志向が強いと解してもよいであろう。特殊なタレントもしくは恵まれた条件を必要とする職業をあげているものもかなりあるが、どちらかといえば女子によりその傾向がうかがわれ、むしろ男子の方が現実的な職業志向をみせているようである。農業と明記したものがわずか2名であること、作家・画家あるいは研究者といった創造的な仕事の分野を希望するものが殆くない（「その他」にごく僅かあった）ことは注目してよいであろうし、教師になりたいとの希望も（サラリーマン志望が多いなかでは）相対的にすくないといえるのではなかろうか。一方、「考えていない」「別 に ない」「わ か ら ない」と答えたものは25%に及び、無答も22%ある。このことは、高校進学をきめている（自分の意志としては）もののなかでも相当部分は将来の職業志向においてまた漠然とした状態にあることを示唆している。

VIII 将来の「希望」と「夢」

設問は「あなたが大人になって、してみたいと思うこと、あるとほできればいいなあと

思うあなたの夢を、何でもよいから書いて下さい」というもので自由回答の形式をとった。従つて、将来自分でこういうことをやってみたい、というものから、世の中や周囲がこうあってほしいというものまで、回答は多種多様であった。それらを整理し、同類のものとしてまとめられると思われる回答を、類別に配列したのが〈表：12〉である。(頻数

〈表：12〉 大人になってしてみたいこと (重複回答)

	男	女	全 体
A) 世界一周旅行	28	46	74
海外旅行	19	36	55
日本一周	9	5	14
外国で生活したい	5	8	13
宇宙旅行・月旅行	6	14	20
無人島へ行きたい	6	2	8
海底・水中に住みたい	2	1	3
その他	8	14	22
(小計)	(88)	(121)	(209/38.8%)
B) 会社・店をもちたい	13	13	26
家をもちたい	7	9	16
金持になりたい	3	4	7
欲しいものを自由に手に入れたい	1	3	4
いい洋服を着たい		3	3
(小計)	(24)	(32)	(56/10.4)
C) 公害のないきれいな町を作りたい	8	8	16
公園を作りたい	1	5	6
自然をとり戻したい	2	4	6
科学者になり公害・ガンを解決	3	1	4
交通事故をなくしたい	3	1	4
身障児・孤児のために働く	1	4	5
大発明・発見をしたい	2	1	3
世の中のためになることをしたい	1	3	4
戦争をなくし平和な世の中にした	3		3
(小計)	(24)	(27)	(51/9.5)
D) 船長になりたい	4		4
美客師になりたい		5	5
スチュワーデスになりたい		4	4
デザイナーになりたい		4	4
スター・タレントになりたい	3	7	10
スポーツ選手になりたい	8	4	12
プロ野球選手・レーサーになりたい	5		5
県会議員・神栖町長になりたい	2		2
(小計)	(22)	(24)	(46/8.5)
E) 自由にくらしたい	4	4	8
一人でくらししてみたい		1	1
人間らしい普通の生活がしたい		4	4

	男	女	全 体
好きな人と結婚できればいい		2	2
空を飛んでみたい	4		4
動物・小鳥と仲間になり話がしたい	1	1	2
天国・地獄をみたい	2		2
(小計)	(11)	(12)	(23/4.3)
F) 総理大臣になりたい	4		4
天皇陛下になりたい	1		1
大統領になりたい	1		1
日本全国を支配したい	2		2
世界を征服したい	1		1
各国大統領と会談したい	1		1
他国と戦争して勝ちたい	1		1
(小計)	(11)		(11/2.0)
G) 悪事のない人命尊重の社会になればよい	1	1	2
貧しい者も人並の生活ができる世の中に	2	1	3
公害のない工業が発達すればよい	1	1	2
日本中農業で平凡なくらしが…	1		1
死ぬ人がなくなればよい	1	1	2
(小計)	(6)	(4)	(10/1.9)
その他	9	7	16
特になし、わからない	19	21	40(7.4)
無 答	45	55	100(18.6)

が少ないものもあるが、回答の原意を尊重する意味であえて過度の整理は控えた。) A類としてまとめたのは、旅行・海外生活ないし探険への希望・夢で、未知の世界への憧れや好奇心をあらわしている。全体を通じてはこれが最も多く、約40% (「なし」「無答」を除くと52%) に達する。少年時代の「夢」としてはもっともポピュラーなものであろう。次いでB類は物質的・経済的欲求、所有への欲求であり、女子の方が男子を若干上まわる。(不明・無答を除く回答比率は女子15%強、男子13%弱) C類としてまとめたのは、社会的な活動、奉仕、貢献などへの志向を内容としたもので、その現実性はともかく、「自分がやりたい」という姿勢のあらわれているものである。頻数は少ないが、「公害」「自然環境保全」への関心の一端がうかがわれる。D類は将来つきたい職業・地位をあげたなかでも比較的具体性ないし現実性のあるもので、内容は男女によりわかればするが、回答比率のうえではほとんど差はない。(男女共に8%強、不明・無答を除く比率では11%強) E類は内容がやや漠然としているもの、あるいは現実性の薄い文字通り「夢」とみられるものである。回答比率の上で(但し、不明・無答を除いた場合) 男女差はみられない。F類は支配・優越への憧れのあらわれであろうが、回答は少数であっても、男子のみである点が注目されよう。G類は主として「こういう世の中になれば……」という願望のあらわれで、C類の回答内容に比べれば受動的だともみられようが、現代社会での矛盾や問題をそれなりに感じとっている結果と解される。

「大人になってしてみたいことは？」という問いを通してみた中学生の未来志向は、ま

ず第一に、未知の世界への接触、未知の経験の獲得であり、また経済的満足や所有への願望であり、同時に「何か世の中のためになることをしたい」という希いであり、憧れや好感を感じずる職業を通じての安定した生活や社会での成功である。上にみたような多面的な希望や夢を、一概にこうと評することはもとより困難ではあるが、さまざまな表現で語られた「希望」のなかに、ある種の積極性をくみとることは不可能ではなからう。しかし、同時に、「(希望は)特にない」「わからない」が全体で7%強、無答が19%弱とあわせて3%をこえたことも見逃さない点である。

IX 現在の心配ごと・悩み・不安

次に、現在どのような心配ごと、悩み、不安をいただいているか。〈表:13〉にあるよ

〈表:13〉 現在の心配ごと・悩み・不安 (重複回答)

	移 転・非移転別			性 別		全 体
	転 入	移 転	非移転	男	女	
学校の成績・テストの成績のこと	60(58.8)	38(60.3)	198(55.0)	132(52.4)	169(58.9)	301(55.8)
進学や受験のこと	63(61.8)	41(65.1)	202(56.1)	128(50.8)	186(64.8)	814(58.3)
就職のこと	6(5.9)	2(3.2)	24(6.7)	12(4.8)	20(7.0)	32(5.9)
自分の容姿のこと	8(7.8)	7(11.1)	32(8.9)	15(5.9)	33(11.5)	48(8.9)
友だちとのつきあいのこと	24(23.5)	17(27.0)	71(19.7)	38(15.1)	77(26.8)	115(21.3)
家族に自分の気持が理解してもらえない	14(13.7)	5(7.9)	29(8.1)	18(7.1)	32(11.1)	50(9.3)
先生に自分の気持が理解してもらえない	5(4.9)	3(4.8)	16(4.4)	10(4.0)	16(5.6)	26(4.8)
自分の家のくらしのこと	6(5.9)	1(1.6)	15(4.2)	12(4.8)	10(3.5)	22(4.1)
自分や家族の健康のこと	14(13.7)	7(11.1)	23(6.4)	24(9.5)	22(7.7)	46(8.5)
その他	2(2.0)	3(4.8)	13(3.6)	5(2.0)	16(5.6)	21(3.9)
無 答	9(8.)	4(6.3)	43(11.9)	34(13.5)	25(8.7)	59(10.9)

註) 移転別では不明(14)を除く。 括弧内は回答者数に対する比率。

うな項目を選択肢として掲げることにより、それを問うてみた。(重複回答)その結果をみると、進学・受験、学業成績についての心配や悩みが予想されたとおり最も多い。これについてはコメントは特に必要としない位であろうが、高校進学希望者の比率の高かった転入層(91.2%)では「受験」「成績」を「心配」しているものは平均より僅かに高率なだけで、むしろ移転層にその心配が多く表明されている。「高校に進学するつもりである」と答えたもの(〈表:10〉)と「進学・受験」を「心配だ」としているものとのを、機械的に対比させることには問題があるにしても、進学の意志の確定者が相対的にすくなく、また自宅での学習時間もすくなかった移転、非移転層(〈表:5〉)にあって「進学・受験」「成績」への不安はむしろ色濃く翳をおとしているようにさえみえる。

その他、〈表:13〉でみられる特徴的な点を摘記すれば、「友だちとのつきあいのこ

と」を悩みとしてあげたものは全体では21%強であるが、これは女子に比較的多いこと、「家族（とくに両親）に自分の気持が理解してもらえない」という「悩み」みは転入層にあって他の2層より若干高い比率で表明されていること、「自分の容姿」に関しては女子の1割以上がやはり「気にしている」こと、しかし、「先生に自分の気持が理解してもらえない」という「悩み」や不満は余り表明されていないこと、「自分の家のくらし（とくに経済状態）」についても「心配」や「不安」は比較的すくないことなどであろう。

選択肢へのチェックと同時に、具体的内容についての併記を求めたが、それらを見ると、「進学・受験」についての「心配」の内容としては、「果して進学できるか、入学試験に合格するかどうか」、「希望校に入れるか」というものが圧倒的に多く、また「進学できなかったらどうしよう」「恥しい」というものも若干みられたが、これはいずれも女子であった。「成績」に関しては「成績がよくない」「成績が下った」「勉強しても成績がよくなる」「勉強に身が入らない」などであるが、「自分は頭が悪い」というものも若干あった。「友だちとのつきあい」に関しては「心から話しあえる友だちがいない。（ほしい）」というものがなかでは多く、また「つき合い方がむずかしい」「喧嘩をしてしまった」「誤解された」「（友だちが）好きになれない」等々、「友だち」を求める気持が表わされており、男子にあっては「ガール・フレンド」のことという記載がいくつかみられた。「家族に自分の気持が理解してもらえない」という不満の内容としては「きょうだいの成績とくらべられる」「差別される」「勉強中に用事をいいつけられる」などが目についたが、「家族で話あいがいい」とするものも少数ながらみられた。女子が比較的多く「悩み」としている「自分の容姿」に関しては「背が低い」「やせたい」というのがほとんどである。「その他」としてはその大半が「部（クラブ）活動のこと」をあげており、また自分の性格に関すること（例えば「神経質だ」「気が小さい」「怒りっぽい」など）も記載されていた。

X 「鹿島開発」についての意見と評価

これまで、限られた面からではあるが、「鹿島」の中学生の生活の概略を、また進路や将来への志向・希望などについて述べてきた。われわれの得た結果からみるかぎり、開発地域なるが故の、あるいは開発ムードに歪められたといわざるを得ないような特異的傾向は殆んど目立たなかったといえる。この調査が学校を通してなされ、記入場所が教室であり、また記名式であったことなど、生徒諸君の回答態度に影響を与えるであろう要因が存在していたことは認めなくてはならない。しかしこうした事情は、設問に真面目に対応し、しかも、他の世代や立場の人の意見や解釈が混入しないようにするための必要な措置であったと考える。あえて、ここでこのようなことをいうのは、とりたてて「特異」ではない、むしろごく「あたりまえ」の中学生諸君が「鹿島開発」について、これから述べるような評価や意見をもっているということを強調しておきたかったからである。

さて、設問は、

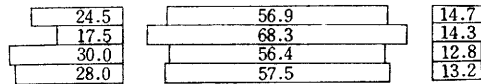
- a 「開発」以後、自分の家のくらしはゆたかになった。
- b 「開発」以後、町の人々のくらしがゆたかになった。
- c 「開発」以後、生活が便利になった。
- d 自分の住んでいるところに大きな港や工場ができたのを誇らしく思う。

- f. これからは農業よりも工業をさかんにした方がよい。
- g. 農業をやめないで続けていってほしいと思う。
- h. 農業と工業との両立は不可能だと思う。
- i. 工業開発は住民の生活にとってはマイナスだと思う。

という9項目に、それぞれ「その通りだと思う」「そうは思わない」「どちらともいえない」の3件法で回答を求めたものである。結果を<図：3>に示したが、移転・非移転別・不明のもの14名は除外し（ただし「全体」には含まれる）、また無答者も僅少（最も多い項目で2.8%）であったので、これも省いた。

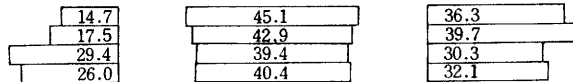
まず「開発以後、生活が便利になった」（c）ということ肯定するものは全体として42.5%、否定するものは同じく25.4%で、「生活の便利さ」という観点からは「開発」に

a. 「開発」以後、自分の家のくらしはゆたかになった。

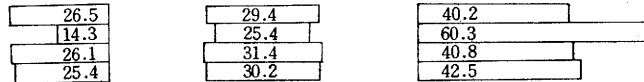


移 入
移 転
非 移 転
全 体

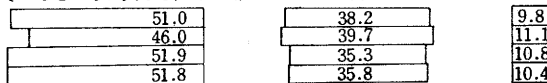
b. 「開発」以後、町の人のくらしがゆたかになった。



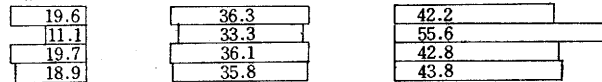
c. 「開発」以後、生活が便利になった。



d. 自分の住んでいるところに大きな港や工場ができたのを誇らしいと思う。



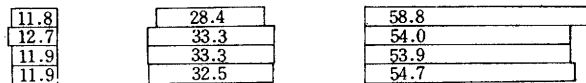
e. 「開発」以後、人々のくらしに落着きがなくなってきたと思う。



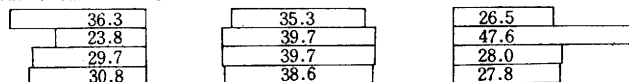
f. これからは農業よりも工業をさかんにした方がよい。



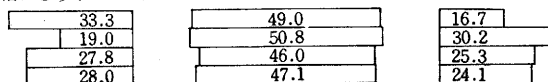
g. 農業をやめないで続けていってほしいと思う。



h. 農業と工業との両立は不可能だと思う。



i. 工業開発は住民の生活にとってはマイナスだと思う。



そうは思わない どちらともいえない。 そのとおりだと思う。

<図：3> 「鹿島開発」についての意見と評価

対しかなりポジティブな評価が下されている。この傾向は移転層にあってきわめて顕著である。これを男女別にみても、男子にあっては肯定するもの45.6%、否定するもの26.2%、女子の場合は肯定が39.7%、否定が24.7%で男子の方がいくぶん肯定的評価が高い。

しかし、「自分の家のくらしはゆたかになったか」(a)といわれると、肯定する回答は大巾に減少し、(全体で13.2%、移転別、男女別ともに層による差は僅少。)むしろ否定するものが、移転層を別とすれば、肯定するものをかなり上まわっている。(全体で28.0%)そして過半数が「どちらともいえない」として評価を留保している。「生活の便利さ」と「くらしのゆたかさ」ということが、中学生の意識のうえでどの程度分化されているものか、また「くらしのゆたかさ」の内容をどのようなものとして受けとめているかについては不明ではあるが、生活が便利になったことは認めつつも、自分の家のくらしがゆたかになったとはしていない点は注目されよう。これは前にわれわれが報告した大人の評価とは対照的な結果である。(茨城大学地域総合研究所年報第6号, pp. 20~29参照)すなわち、大人の場合、「生活の便利さ」に関して「よくなった」と評価したものは移転層、非移転層ともに62.4%で、「わるくなった」と評価したもの(移転層6.0%、非移転層4.6%)より圧倒的に多く、ひとり転入層のみがつよいマイナスの評価を下していた。(「よくなった」21.7%、「わるくなった」57.5%)また「くらしむき」についての大人の評価は、(設問に「収入などの経済面」と注記したので、その内容はより経済的側面に限定されて受けとられたと思われる)全体としてはプラスの評価が41.6%、マイナスの評価が15.3%で、相対的に転入層でのプラス評価が低いとはいえ、総じて「くらしむきがよくなった」と判断している。従って、大人の場合は、「生活が便利になり、くらしむきもよくなった」(移転・非移転層)あるいは「生活は不便になったが、くらしむきは(やや)よくなった」(転入層)とみているのに対し、中学生は「生活は便利になったと思うが、(自分の家の)くらしがゆたかになったとはいえない」との評価に傾いているといえる。

ところが、「町の人のくらし」(b)という点になると、「ゆたかになった」と評価するものが殆どをこえ、「そうは思わない」というものを若干上まわる。自分の家にくらべ、町の人のくらしむきをはるかにポジティブに評価しているのは何故なのであろうか。「町の人のくらし」ということの内容が、自分の家のそれと同じ側面または次元で比較・評価されたというよりは、町全体の消費生活面での派手さ、ないしはある種の活潑さが彼らの目に「ゆたかさ」として映ったのであろうか。ともあれ、自分の家のくらしにせよ、町の人のくらしにせよ、「ゆたかになった」との評価を否定するものがともに3割近くいることは一応注目しておいてよいであろう。

さらに「開発以後、人々のくらしに落ち着きがなくなってきた」(c)と「思う」ものは、全体で43.8%に達し、「思わない」というものを、これも大巾に上まわっている。特に移転層にこの傾向が目立つが、これは居住地近辺の環境条件と関連があろう。また男女別では、「落ち着きがなくなってきた」とするものが男子では37.3%であるが、女子では49.5%と半数に及んでいる。

次に「自分たちの住んでいる所に大きな港や工場ができたのを誇らしいと思うか」(a)との問いには、予想に反して、否定する回答が圧倒的に多く(全体で51.8%)、肯定は1割前後という結果であった。(この項目に対しては男女間で回答に差は殆どみられない。)

世界的規模を誇る堀込港，そこに浮ぶ内外の大型船，立ち並ぶ工場群，そしてその近代的設備——これらは「鹿島」の変貌と威容を見る者に強烈に印象づける壮大な景観である。「開発」がもたらすもろもろのデメリットはともかく，日本の産業的成長の最先端をいく諸施設を近くにもつことを，中学生は内心，素朴な意味で誇らしく感じているのではないか，との予想はみごとくつがえされたわけである。ここでも「開発」に対する中学生の厳しい表情を垣間みた思いがする。

周知のように，「鹿島開発」を企画した県の基本的発想は「産業構造を農業中心から工業中心にあらため，地域の生産性を高めて，後進県の地位から脱却しよう」というものであった。こうした「開発」の基本姿勢・方向に対しては，なによりもまず現実の事態の進行が，そしてまた各方面，各レベルの議論や問題指摘が，それなりの評価を下している。では地元の中学生は，現在（47年）の時点で，あらためて「これからは農業よりも工業をさかんにした方がよいか」（f）との問いかけに，どのような回答を示したであろうか。「工業優先」を肯定するものは全体で8.3%にすぎず，農業がその半数以上をしめる非移転層にあっては，肯定意見は6.9%とさらに少ない。これに対し，「工業優先」を否定する意見は全体で48.8%，約半数に達する。また男子にあっては否定的意見が57.9%，肯定的意見が7.1%，女子では否定的意見40.8%，肯定的意見9.4%となっている。このように，肯定と否定の差は明瞭ではあるが，「どちらともいえない」という中間的意見も全体で41.9%あることも見逃せない。従って，中学生にあっては，かなりの中間的意見を含みつつも，今後の「工業優先」の方向に対しては否定的意見が優勢であったとみられよう。

次に「農業をやめないで続けていってもらいたい」（g）という立場には強い肯定・賛成の意見が表明された。全体で54.7%，いずれの層にあって（男女別でも同様）半数以上が賛成意見である。ただしここでの否定・反対意見は，前項（f）での「工業優先」賛成意見を僅かではあるが上まわる。総体的に，中学生の農業存続を支持する声は，たとえそれが素朴な願望であるにせよ，強いものであるとみられる。

いわゆる「農工両全」が，「鹿島開発」の眼目として県当局によりさかんにPRされたことはよく知られている。ここでは対象が中学生であることを考慮して「農業と工業との両立は不可能だと思う」（h）という表現で，「農工両全」に対する意見を求めた。（前f，g項も内容的には「農工両全」に関連があるのはもちろんである。）結果をみると「両立は不可能だと思う」ものは全体で27.8%，「不可能だとは思わない」ものは30.8%で後者が幾分まさっている。しかし移転層にあっては「両立は不可能」とみる意見が約半数に達し，（47.6%）他層とやや対照的な傾向をみせる。おそらく，「農業団地」として造成された現住地へ「移転」してきたものの，実際にそこでは農業はあまり行なわれず，転業あるいは兼業化が進行しているという現実が，とくにこの層のものに強く印象づけられたためと思われる。一方，転入層にあっては，「両立は不可能とは思わない」という意見が他層にくらべ優勢である。なお，男子では「不可能ではない」とみるものが35.3%で「不可能」とみるもの（29.4%）より若干多く，女子にあっては両者の差は殆どなく，中間的意見のもの（43.2%）が多い。さきに，中学生にあって「工業優先」あるいは「工業開発」に対し否定的，批判的意見が優勢であることをみたが，「農業と工業の両立」に関しては必ずしも「不可能」だとはみていない結果が示された。（「どちらともいえない」との中

間的意見が4割近いことにもあらわれている。)このことは、中学生が大人の場合(本号所載の報告—その2—pp.2-8参照)とちがって、「農工両全」を是認しているというよりは、農業存続への支持・希望が強く表明されたこともあわせ、「工業優先」に否定・批判的であるからこそ「農工両立」を不可能だとはしなかったものと解すべきだと考える。

これまで、いくつかの側面から「開発」に対する中学生の意見をみてきた。それによると項目によってはポジティブな評価を与えてはいたが、「開発」の影響、もしくはその構想に関わる面では批判的評価の方が優っている傾向を示した。そこで、いわば「開発」への総合的評価として「工業開発は住民の生活にとってはマイナスだと思うか」(i)との質問を提示した。結果は「マイナスだ」としたものは、これまでの批判的傾向から予想されるよりは少なく全体で24.1%であった。移転層では「マイナスだと思う」ものが30.2%、「思わないもの」19.0%、一方転入層では前者が16.7%、後者が33.3%とちょうど逆の傾向を示している。男子では「思う」31.3%、「思わない」30.2%と両極の判断がほぼ伯仲し、女子では「思う」17.8%、「思わない」26.1%であるが、中間的意見が半数をこえている。結局、総体的にみて、「プラスともマイナスとも決めがたい」との判断が中学生の評価の大勢をしめていることになる。

IX 公害についての意見と態度

公害についての意見と態度をしるための設問は

- a 「開発」に公害はつきものだから仕方がない。
- b 公害もいまぐらいの程度ならとくにさわぐこともない。
- c 公害はたとえわずかでも絶対あってはならないものだ。
- d 住民がとくにさわがなくても県がきびしく取締ってくれるから大丈夫だと思う。
- e いまは企業(工場)も注意してそれほど公害はださないだろう。
- f 公害はあっても、開発のおかげでよくなったこともあるのだから、がまんすべきだと思う。
- g 公害には住民が力をあわせて反対に立ち上るべきだ。
- h 公害はこれからもひどくなると思う。

の8項目に、「そのとおりだと思う」「そうは思わない」「どちらともいえない」の3件法で回答を求めたものである。結果を<図：4>に示すが、ここでも移転・非移転不明と無答は省いた。

まず、「公害はたとえわずかでも絶対あってはならない」(c)との立場を肯定する意見は全体で34.9%「そうは思わない」とするもの(22.1%)を大きく上まわる。大きな差ではないが、移転層で肯定するものの比率が高く、転入層で若干低い。男子では肯定57.5%、否定24.2%、女子ではそれぞれ52.6%、20.2%である。これはいわば公害についての原則を主張する立場であるが、これに対し、「いま位の程度なら騒ぐこともない」(d)とか「開発に公害はつきものだから仕方がない」(a)、あるいは「県側の取締りや対策」(b)、「企業側の自主規制を期待する」(e)、また「公害はあっても開発のおかげでよくなったこともあるのだからがまんすべきだ」(f)等の、何らかのかたちの現状容認的な立場に対しては、かなり強い否定的意見が表明されている。とくに(a)および(f)のいわば「あきらめ」と「がまん」の立場には否定的反応がより顕著である。男子と女子で

a. 「開発」に公害はつきものだからしかたがない。

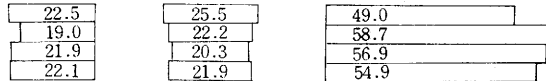


入
転
移
全
体

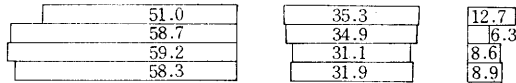
b. 公害もいまぐらいの程度ならさわぐこともない。



c. 公害はたとえわずかでも絶対あってはならないものだ。



d. 住民がとくに騒がなくても県が厳しく取締ってくれるから大丈夫だと思う。



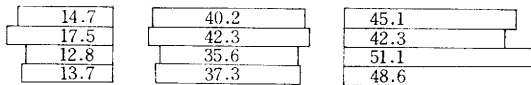
e. いまは企業(工場)も注意してそれほど公害はださないだろう。



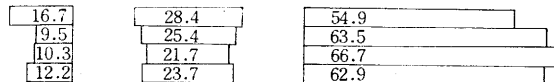
f. 公害はあっても、開発のおかげで良くなったこともあるのだから、がまんすべきだと思う。



g. 公害には住民が力をあわせて立ち上るべきだ。



h. 公害はこれからもひどくなると思う。



そうは思わない どちらともいえない そのとおりだと思う

<図：4> 公害に対する意見と態度

は、現状容認を否定する意見が「開発のおかげ……がまん」(f)を除いて男子の方に強く、なかでも「企業の自主規制への期待」(e)は、女子の39.0%が否定しているのに対し男子は51.2%とかなりの開きが見られる。(「期待」肯定の立場は男子14.7%、女子13.9%) 大人を対象にした場合と設問の形式を若干異にしている(大人への質問は、上記b, c, fの各項目に「住民の迷惑や反対など、企業の力の前には太刀打ちできないのだから諦めている」という項目を加え、「その他」をあわせた5選択肢中より1答選択の形式である。——年報第6号p. 45およびpp. 29-34参照) ストレートな比較はできないが、大人の場合と比べ、現状容認的意見が一層すくないのである。大人にあっては転入層において、「公害は絶対あってはならぬ」とする原則的主張がやや弱く、相対的に現状容認的な意識・態度がみられ、他層と対照をみせていたのであったが、中学生の場合も転入層とそれ以外の層との間に同じような傾向がみられる。しかし、その差異、対照は大人におけるほど顕著ではない。

「公害には住民が力をあわせて立ち上るべきだ」(g)との意見には全体で48.6%、約

半数が同意しており、層によるちがいはさほど目立たないが、(男子では肯定52.8%, 否定13.9%, 女子で肯定44.9%, 否定13.6%) 移転層で肯定するものの比率が他層よりやや低く、逆に否定するものの比率が僅かながら高いことが多少注意をひく結果である。しかし、原則的主張への賛同が強く、「あきらめ」や「がまん」や「期待」等の意見・態度をかなり厳しく拒けてきた傾向からすれば、「公害には住民が立ち上るべきだ」との、これまた一つの原則論には、もう少し多くの賛同が表明されてもよいように思われる。住民側の「公害反対運動」になんらかの疑問ないしは限界を感じてでもいるのだろうか。上の結果はそうした疑問を抱かしめるものであろう。

最後に、公害の今後の見通し(h)については全体で62.9%のものが「ますますひどくなる」と見ており、こうした見通しを否定するもの(12.2%)をはるかに凌いでいる。大人の場合「ますますひどくなるだろう」と答えたものが全体で66.9%であったが、非移転および移転層に悲観的な見通しがきわめて強く、前者の76.7%, 後者の59.9%が「ひどくなる」としており、転入層ではこの見方をしたものは46.9%にとどまっている。一方「今より少なくなるだろう」と見ているものは全体で僅か2.5%にすぎなかった。(転入5.8%, 移転2.3%, 非移転2.3%)従って、大人の方が公害の今後の事態をより深刻なものとして見通しており、わけても地元住民層にその傾向が著しい。(年報第6号, pp. 38—39参照)中学生の場合も非移転層に悲観的な見方がややまさり、転入層にあって楽観的な見通しが若干強く、傾向としては大人の場合と共通したものを示すが、転入層の楽観の程度および他層(地元住民層)との対照は大人におけるほど顕著ではない。

さて、「鹿島開発」「公害」に対する中学生の意見・態度は以上のごとくであったが、総じて批判的ないし否定的意見が優勢で、しかもそれがかなりの一貫性をもっているところから、中学生が「工業開発」に対し大人以上に厳しい眼を向けていることが読みとれるであろう。

XII あとがき

この調査を実施してからすでに1年半になる。これは時間的にみれば決して短い期間ではない。しかし結局、時間に追われ、資料の検討や分析ではいくつかのこした点がある。例えば、ある設問にある回答をしたものが、他の設問ではどのような傾向を示すかという回答間のクロスや、回答者の職業(家庭の)別による分析などには殆んど手がつけられなかった。また設問項目の不備にも気づいた。このように、今回の報告には不十分な点を多々残してはいるが、一応のまとめをおえた段階で、感じたことを誌しておく。

調査対象とした中学生の全般的印象は、前にもふれたように「開発地域」なるが故の、特異な、あるいは歪んだ姿ではなく、むしろ平凡な、見方によってはのんびりとした中学生生活を送っているように感じられる。それは、勉強時間、テレビ視聴時間、好まれるテレビ番組、雑誌の購読状況、学科の好悪傾向、小遣いの額や用途にもみられたし、希望職業や将来の希望・夢、現在の悩み・不安などからもうかがわれた。簡単に表現することがゆるされるならば、われわれの調査した中学生の姿はごく「あたりまえ」であり、むしろ「堅実」とさえいえるように思う。

しかし、現在のこうした平穏さ、またのびやかさが今後もつづいていくという保障はない。高校に進み、社会との接触面も拡大し、やがて経済的にも自立しなければならない時

期が近づくにつれ、「現実」との間で様々なトラブルに遭遇せざるをえないであろう。欲求をかきたたせ、しかもそれを安易に、かつ短絡的に満足させようとする生活態度を若ものにとらせるようなモデルは、現在の社会に溢れている。これはわが国の全般的風潮ではあるが、しかし、われわれが「鹿島」の調査を通じてみてきたように、比較的短期間での急激な生活基盤の変化、しかも消費生活面での肥大化、そして変化への受動的な対応等、大人の提供する生活態度・適応方式のモデルは、鹿島の中学生の今後にとって大きな作用因となるであろう。この中学生たちが高校を卒える時期、あるいは実社会に入る時期、どのような考え方や価値観、将来への展望や志向、そしてどのような適応の方式を身につけているか、これらを追ってみることは、新たな問題を提起してくれるにちがいない。

(49. 2.28)